
あの、何？え、勇者の供？

耀夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの、何？え、勇者の供？

【Nコード】

N7285Y

【作者名】

耀夜

【あらすじ】

押入れの中から現れたのは自分たちの執事だと名乗る男と、將軍を名乗る女。親に捨てられた俺らに「貴方様方はこの国の跡継ぎです」と言う。この国、ってどこにあるんだよ。そして自らの出生と親の秘密を明かされ、王子様と従者と共に何故か魔王を倒すことに

.....

いち

白で黒で赤で青で紫で橙で翡翠で桃で？で黄緑で群青で茶ですべての色だった。

最早何を言っているのかも分からない。てかわかんねんだよ。

生まれた時から親に三つ子共々捨てられ、園田って言う婆さん家に引き取られ、まあお金持ちのせいかオレらのことを実の娘息子同然に育ててくれている。現在64歳。ま、そんなことはどうでもいい。

しかもいきなり何か変なところに連れてこられてさー、何だ。寝てたはずなのに。

『世界が終焉の時を刻もうとしている。汝、世界の終を望まぬ者よ』

世界？そんなもの勝手に終わってくれ。俺そんなもん選ばれてもねえし。

『大樹は音琴を奏で、地は破れる』

へえーーーーー、そう。だから何だ。

『終焉が始まりか続きを見る娘、傍観者でありながら汝に手をかす者、汝と共に世界を変える者達。神に愛された子よ』

神、そりゃ愛されてるだろうよ。娘二人と息子を寒空の下（真冬に）公園に置き去りにしても良心が痛まない親のところに生んでくれない！。

『選べ』

何を？知らない人と金貸しには『はい』って言うなってしつけられたんだが。

『その他多くの力なき者と共に滅ぶか、．．．となるか』

「うっせえな。分かったよ。やる。だからさっさと俺の夢から出てけ」

めんどくせえ。

「何を一人で言ってるんだい？」

「は？」

「大丈夫です。きっと脳までカビが発生してきたんですよ」
ぐらりと視界が揺れもとに戻った。

ミンミンと鳴く蝉。今は比較的涼しいため節電も兼ねて扇風機。テレビから聞こえるアナウンサーのニュースを伝える声。

「え、と」

「どうした？具合でも悪いか」

二番目の妹の梓あずながコーラのプルタブを開け俺に手渡した。

よく冷えている。今更ながら気持ちの悪い汗でベトベトするのが嫌だが。

「いや、変な夢見てさ」

「変？」

夢など常に変だ。どこもかしこも変なのに今更夢が変とはって顔してる。

「まあ、そんな事はいいいから部屋の掃除でもしておきなさい。晴子さんばかりに頼むのはよくありませんし」

着物を着ていなくても何処か和な気配を漂わせている。このおばあちゃんの良いところは必要最低限のことは自分でさせるところだ。

いい年して自炊のできない大人なんぞにはなりたくもない。

其の忠告を軽く受け止め、妹達と共に上へ上へ。

二十畳はあると思われるフローリング。

「めんどくさい」

一番年下である妹咲夜は冷静だが掃除は嫌い。何故か人の家の掃除によく借り出されるんだが……

使わない本を縛り、何故かピンクでフリフリのソックスが出てき咲夜が無言でどこぞに持っていった。腐りかけの何かや黒い生命体（丸めた新聞紙で中身が見えない程度に梓が殺った）などの他に大したものが出なかった。そして一応掃除機をかける。

「おーわりー」

「押入れは？」

妙なことを聞いてきた。押入れなどいつもほったらかしなのに。

「んじゃ、ついでにそこもやるか」

梓はテレビを見ながらブーブー文句を言ったがまだお気に入りの番組は始まらずニュースの途中だったので面倒くさ気にやってきた。

『岡山県三井市で竜巻が発生し、男女三人が死亡しました』

あまり気にせず咲夜は押入れの戸を引いた。

「あれ？」

開かない。

「ちょっと手伝いなさいよ幸輝^{しんき}」

「そう言うあなた様も手伝ってはいかがですか」

「バレた」

「はじめからバレてんだろ。っの、ひ・ら・けよああ!？」

つつかえ棒がしてあるのではないかと疑ったが目の前に広がるのは断じて押入れの木の台と漆喰ではない。

二段で出来た押入れ。その下の段には思ったとおり整理整頓された荷物があるが問題は上の段。

何故か鉄で出来た階段があり何故か女が座っていた。

薄紫の瞳は退屈な光を宿し、腰まで伸びている髪は栗色。極めつけは格好だ。

あのRPGみたいな鎧?を腰のちよつと上らへんまでの長さで多分鋼、だと思いが身に付け腰にもそんな感じの鎧で足もブーツみたいな野を履いている女だ。

あちらはニコリともせずこちらを見ている。冷や汗で手が滑る。沈黙が痛くて何も言えないし目が痛くなってきた。

どうしろと?こんな場面のスルースキルなんぞもってない。

「どうしたんですか」

不審に思った咲夜がひょいと覗くとその女性の目が輝いた。待て、これはやばい気がする。

「お迎えに参りました。と言えと何度言えば分かるんですか」

目を輝かした女性を押しつけ執事服の初老の男性が出てきた。あの、どうやって？

梓は金魚のように口をパクパクしている。このような状況で一般人らしい対応だ。たぶん。

「お初にお目にかかりますな、姫、王子、遅くなりましたがお迎えに参りました」

目があった瞬間体に電撃が走ったような衝撃がきた。理性ではなく本能が同族だと感じ、咲夜が目を見開く。

に

深い、深い大樹で出来た都市。人など滅多に入ってはこれない。直人を惑わせ、同じところをぐるぐる回り続ける仕掛けがあるから。大樹に囲まれた街、その中でも一際目を引く建物があった。大理石でできた城に沢山の蔦が巻き付き森と同化しているようにも見える。

某月某日、エルフ王は、さんさんと日光が照るテラスで白い大理石の椅子に座り、綿をたっぷりと詰めた若草色のクッションに手をもたせかけていた。そのもたせかけている両方の手は一つ指輪がはめられていて、日光を反射し、空を映している。

無造作にその手が髪をかきあげると同性である男の瞳ですらくぎ付けになる。翡翠の髪、深海より直深い紺碧の瞳。髪にも白髪が混じっていたが手は滑らかで些かも美しさが損なわれてはいない。顔立ちは百戦錬磨の宮廷女官ですら微笑まれると呆気なくおちるであろうと思われる。そのエルフ王の視線が横の衛兵に向けられた。

「……………ハの儀が行われた」

やや退屈そうに形のいい口から言葉が零れる。

「承知しました、ではレグナス殿をお呼び致しま…」

す、と言わず言葉を切った。もう来たのかと、自動移動式玉座を回転させれば二十歳を過ぎた辺の女が失礼にならない程度の速度で歩いてき、エルフ王の3歩くらい前で片膝をついた。

「陛下、失礼ですがその任、任せてはいただけませんか」

「隊長殿、お待ちください!」

慌てて衛兵がかけてきたが、エルフ王が片手で制すと口をつぐみ渋々止まった。

「何のことだ」

「おとぼけにならないでください。レグナスより私に任せてはいただけませんか?」

「たかが人間風情が、エルフである皇帝陛下に口をだすとはっつ!」

「良い。とやかく言うでない。しかしスウ、其方には魔力がなからう、どうするつもりだ」

衛兵に人間風情と言われ陰った瞳に光がもどる。

「はっ、そこはアウスト様にお願ひしました。陛下の許可が下りればかまわない、と」

「アウストが、か。まあ良い、行け」

「しかし!陛下っ」

しつこく言う衛兵にわざとか、たまたまか判別しにくいがエルフ王の手から聖杖が滑り衛兵の額にぶち当たった。

沈黙がしばらく満ちたが、他の者は礼儀正しく見ぬふりをし、隊長

は礼をして足取り軽く立ち去っていった。

「あの、なんて言いました？」

「姫、皇子と申しあげましたが、解りませんか？」

首をかしげられてもなあ、そりゃあ一応姫、皇子などという単語は聞いたことがある。絵本の囚われの姫とか白馬に乗った皇子とかメルヘンチックな部類のことだが。

「ですから、貴方様方は私たち、妖精族^{エルフ}のしかも王家の血を引く方なんですよ。生まれつき顔立ちが整ってらっしゃいますし」

「質問、俺は何でモテないんだ」

「それは、幸輝が告白フラグに気づかない鈍ちんだから」

せつかく初々しい一年生が「付き合ってもらえませんか！」と言って「何処に？」と返し玉砕していた。

同級生の告白でさえ気付かない。ばかだ。今更だがそう思うよ。

「鈍くねえよ。反射神経だっていいし」

「意味違っただけど」

反射神経は関係ないですから……

「で、何処に私達がエルフの王族だと言う証拠が？」

「これです」

バリツと体中に静電気が走った。三人の手首に青白い魔方陣が浮かび、しばらくしてふっと消えた。

「王族の血を引く者はこのような印があるのですよ」

ニコニコと毒のない笑みを浮かべている。

「えと、貴方方もエルフなんですか」

「私は違います」

今までずっと黙っていた女の人が口を開いた。

「私は人間です」

人間、その言葉には何かが込められていた。口ではうまく表せないが良いものではない、と思う。

「まあ、そこは気にせず。さて、皇子、姫、あなた様方にはこの国に戻ってもらいます」

「は！？おい、ちょっと待て、俺らはその…エルフの王族の血筋なんだよな」

「そうですが、何か不都合でも？」

「あんたらって、異世界の住人だよな」

「ええ。そうですね」

「じゃあさ、何で異世界の住人である俺らは何で此処に居るんだ？」

「簡単なことでございます。
貴方の母君がこちらの
世界に追放されたからですよ」

に（後書き）

話がまともに出ないよ。

誤字脱字があつたら教えて下さい。

さん

「つい……ほう？何で？」

「それは……前陛下がまあ、その、上級妖魔サキュバスと通じていたからだ」

淫魔、確か漢字はそれで……ああ、それで姉ちゃんの頬と耳がトマト顔負けに赤いのか。納得。

「まあ、そのサキュバスが珍しい方でして、男をとつかえひつかえする方でなく肉食系でなかったんですね。普通、私の魅力にひれ伏せて方々ですから」

「ひ、ひれ伏せて」

「そのような方の中でも珍しく草食系で森に迷い込み足をくじいた処を前陛下がお助けになられたのだ。

お二人共一目惚れでな、お姫様抱っこしながら城に入った前陛下を見た衛兵は腰を抜かしてしまったとか」

「リース様、貴方様方の母君が生まれたんですよ」

「リース？浦上実咲うらがみみさきじゃないのか？」

浦上実咲、現日本で一番美しい大物女優。この前ジャッキーチェンと共演したってテレビで言ってたな。

15歳の誕生日を向かえたある日、育ての親に産みの親からの手紙を見せてもらった。オレらが入った箱に入れられていたらしい。

驚きなことに名前が書かれていた。大物政治家との不倫で俺らが出来てしまったらしいってのは婆ちゃんから聞いた。朝早く散歩をしていると不審な女性がいて、話を聞くとその女性は涙ながらに話したそうだ。真実を。

聞いたときは今更どうなるかと思った。大事な選挙中の足引っ張って子供だというのも癪だし、幸せいっぱい結婚生活を送る家族を跡形もなく壊しても何も得られるものなどないのだから。

ま、犯罪にも手を染めず非行もしないのは我ながら上出来だ、と思う。

「当時14歳だったリーサ様はこの世界に追放され、二度と戻れなくなりました」

「そこで、かの血を引く貴方様方に白羽の矢がたったのですよ。ああ心配なさらずともこちらでの人の記憶は貴方様方の部分だけ消しておきますので」

「さあ、迎えに参りました。私たちと共にご帰還を」

嫌、無理。おい、ちょ、押入れエエっつ！助ける！俺皇子なんか向かねえんだよーーーーーっ！ドラマ見れねえだろおおっつ！

「と、言うことで無事ご帰還なされました。陛下」

「うわああん、かせいふの〇タみれながったあーーーー」

「はなしなさい!!、けるわよ? かんがみたいにきつてもけるからねっ!」

「おい、やめろ。がらじゃねんだよ。おーいはるこさーん」

一人は金髪の髪を振り乱して泣くし、一人はアウストの手を噛み切りそうな勢いだし、一人は嫌そうに顔を顰めるし、衛兵は苦笑いを浮かべるし、侍女は目を輝かせるし、大混乱だ。

「エウレル、スノー、セウレン、この者たちに部屋を」

「「「かしこまりました」」」

他のエルフの侍女は羨ましそうに見ていた。

「ああ、かわいらしい」

「三つ子で、人間の血が混ざっていてもいいわねえ」

「保護浴をくすぐるのよ」

「何とかお世話できないかしら」

「まだ八つの年にもなっていないからその内会えるでしょう」

「しろすわ」

自分の姿を見てそう呟いた。

訳の分からない女性に肩をつかまれ部屋に連れてこられた。可愛い木製の（輝石がはめ込まれた）テーブルや椅子、戸棚、日に当てられたいい匂いのする布団、枕元に置かれたぬいぐるみらしき物、ピカピカに磨かれた鏡に映るのは幼い少女。もちろん、自分だ。多分4歳くらい。

ズボンはゴムが入ってるから気づかないが上のTシャツはダボダボだった。大きいです。

幼児だ。何処に私の過ごしてきた16年は消えてしまったのか。

「さあ、姫着替えを」

ニコニコとした女性。

「すみません、わたし、なんでちっちゃくなっただんですか？」

背が小さいため上目ずかいになる。こてん、と首をかしげると女性
が口をぱくぱくさせた。

「？」

「ひ、姫様、あのすみませんが私には分かりません」

「そう…ですか」

内心、腸が煮えくり返っていたがこの人に罪はない。八つ当たりをしても意味がないことをこの年で知っているためそんなことはしないよ。うん。

「あの、アリア姫は何色が好きですか？」

アリ、ア？

「えと、わたしですか？」

「そうです、あ、お名前をお聞きでないのですか？」

「そうですけど」

「アリア・フォン・ラース・エルフィー・オーストイアルですよ」

アリアが『名前』フォンは『長子』『長女』ラースは『末の娘』エルフィーは『王家』『苗字』オーストイアルは『領土』『土地』だそうだ。

「あ、わかりました」

「賢いですね」

賢い、褒めてくれたのだろうか。この姿のせいかもしれないが。

「さあ、お着替えしましょうね」

キラキラさせた女性に、コクリとうなずいた。

「おー、にあってんぜ」

「そりゃ、どうも、かぼちゃパンツじゃないんだね」

「エルフってびじんだね」

三人バラバラなことを言いそれを見つめる母の眼差しならぬ侍女の眼差し。

「どうする？」

「にげるのよ」

舌足らずな口が憎い。しかしそのおかげで侍女は早くも脱走計画を練り始めた姫と皇子に気づきもしない。

「へやは、おおきいあながところ、どころあいてたけど」

「おれも」

「うちも」

「じゃ、ねたふりをしてとつぽう？」

とんだ姫と王子だ。悪知恵だけはよく働く。

「そうしよう」

「あの、ひとりでフロくらいは、はいるんだが」

「いえ、どうぞ」

なあ、精神面では俺も男、普通一人では入れるんだが、なかなかエルフの侍女が許してくれない。

「お背中をお流しするの侍女の仕事ですから」

背中だけを洗ってもらい後は全力で拒否した。残念そうだったがこれだけはな……

寝間着らしきローブを着せられる。猫耳フード付き。

着ると四、五人の侍女が目を輝かせた。正直、やめて欲しい。

そして布団に入り、すーすーと寝息をたてる。

しばらくして侍女が一人も居なくなっただのを確認し、そつと寝床を抜け出し晩ご飯に出されたバターナイフでせっせと木をくり抜き始めた。

「へ、陛下失礼します。皇子と姫様方が部屋の穴をくり抜いておいでです」

何処でそんな術すべを学んだのか気になるな。

「うむ、そうか。普通そうだな」

4歳時（精神的に16）が脱走計画を練るところの方がびっくりだ。

「どうなさいますか」

「捕まえてこい。勿論無傷で」

「はい」

とてもいい笑顔でアウストは微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7285y/>

あの、何？え、勇者の供？

2011年11月23日16時52分発行